

# ボク娘彼女 ミズキくん

体験版



つじもが町に殺ってきた



# 目次

本編：3p

番外編：121p

後書き：159p

□ヶ地：新潟市

本作品(すべてまたは一部)を無断でアップロードする事を禁止します。

違法アップロードによって著作権を侵害した場合は、著作権法第119条1項の規定によって10年以下の懲役もしくは1000万円以下の罰金、またはこれらが併科されます。

違法アップロードと知りながらダウンロードすることは著作権法第119条3項違反により、二年以下の懲役若しくは二百万円以下の罰金に処し、又はこれを併科されます。









「おにいちちゃんッ！おにいちちゃんッ！  
もっと！もっとはげしくうごいてッ！」

「ミズキッミズキッ！だ、だめ、も、もういきそうッ」

「ダメッ！もっと！やめちゃだめッ！  
ボクもいくっ！ボクもイクウ！ううううう！」

「はあッはあッはあッ あああ～ミズキい」

絶頂を堪えつつ必死になって腰を動かす。

おにいちちゃんと呼ばれて興奮する情けない俺。  
この背徳感はいつまでたってもぬけないし  
それが興奮するせいでいつまでも抜け出せない。

弟ができたと喜んでいたら、  
魅惑の妹みたいになって、彼女になっていた・・・

そんなミズキくんのと俺の話は  
カードゲームで知り合うところからはじまる。



あーん

あああ、おにいちちゃんツ  
おにいちちゃんツ！  
すごいッ！すごいッ！  
すごいッ！くるッ！

あ  
あ  
あ

ミズキッ！  
ミズキッ！  
おにいちちゃんもうッ  
い、イッていい？  
もうッ限界ッ！

あ  
あ  
あ  
あ

だめっ！まだだめえ！  
ボクもッボクもイクッ！  
いくからッ！もつと！もつと！  
もつときてッ！はげしくウ！  
あつ！あ！アッ！アッ！  
アクウ！あくうううう！

あああ！  
い、いくうう！

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ







アッ！アッ！アッ！  
イクッ！イクッ！  
もっとなついてッ！  
アヒッ！あひい！

うッ！  
うッ！  
ミズキい…

おにいちゃんのちんぽすごいッ！  
おかしくなっちゃうッ！  
ボクいつちやうッ！いつちやうッ！

いっしょに…  
あひい…

あああ…  
ミズキくんが…  
メスの顔で  
いつてるう…

だ…だ…だ…

だ…だ…だ…

だ…だ…だ…

だ…だ…だ…







近所にすむミズキくんとはゲーム会で知り合った。  
世界的に人気のトレーディングカードゲーム  
『マジック&グリッチ』略してマジグリの交流会でだ。

「おにいちゃん！はやくはやく！  
新版パッケなくなっちゃうよ！」

「遅刻した！ごめん～  
でも予約してるからなくなるはないよオ」

放課後のミズキくんと隣町の駅前で落ち合う。  
今日は新発売のパッケージを一緒に買う約束の日だ。

購入制限がかかる程の人気商品、複数人で購入して  
トレードするのは基本中の基本だ。

ミズキくんにとって俺がはじめてのマジグリ仲間で  
トレードできる事を素直に喜び、すごく感謝してくれる。

俺もゲーム熱が冷めてきた頃だったので、不公平なトレ  
ードにも応じつつ、相場感の教育係のようにも振舞った。

一人っ子で弟がほしかった俺は、頼られるとついつい  
養分になってしまう気質だとわからせられたりもした。









「このマジックさあ〜グリッチのシナジーやばない？  
マジでもらっちゃっていいのオ？」

「いいよ、こっちと交換だからね、でも複数枚揃えたら  
このグリッチでこっち回したほうが早いんじゃない」

「そっかあ〜じゃあ揃ったらどっちがつよいか  
対戦しようね！で、強かったら返して！アハハハ！」

「調子いいなあ〜 まあ大会だけなら貸してやるか」

昔同級生とマジグリを遊んだ時間を思い出す。  
とても楽しい日々だった、なあ・・・

マジグリがマニア化、レアカードの高価格化で、  
どんどん客層がニッチになっていくなかで、遊ぶ面子も  
減っていったんだっけ。

ミズキくんの周りにマジグリを遊ぶ友達はいないそうで  
その責任はマニア化に拍車をかけた俺たち古参のせいだと、  
すくなくらず申し訳なさを感じたりもする。





「今度の日曜日の大会さあ～このグリッチでフルダメコンボだすデッキ組むんだ！レッドマジシャンからのシャイニグワンドグリッチでズババババァ！」

無邪気な表情で興奮するミズキくん。

素直だし、茶目っ気たっぷりだし、本当に可愛い弟ができてしまった気分だ・・・。

この幸せな時間になるべく長く続きますように・・・

「ミズキくんは高ダメコンボ好きだからなあ～  
即効性求めすぎるとカウンターに弱くなるから  
その辺の対策かんがえよっか」

「オスオッスツツツ！」

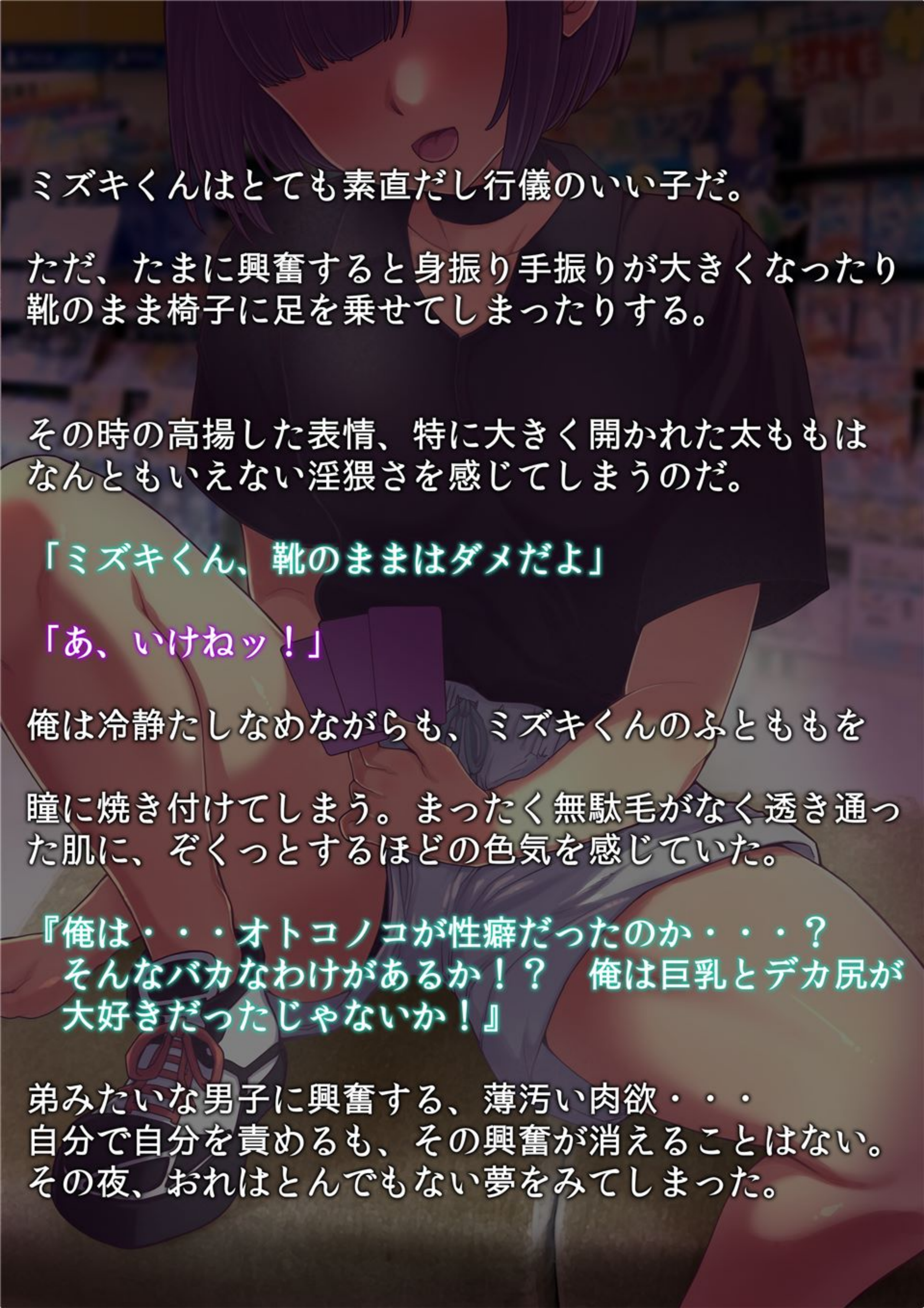
一方で、幸せな時間が続くこととは裏腹に、最近すごく悩ましい思いを抱えていた。

誰にも打ち明けることができない感情だ… 俺は、ミズキくんの体を、いやらしく想ってしまうのだ。









ミズキくんはとても素直だし行儀のいい子だ。

ただ、たまに興奮すると身振り手振りが大きくなったり靴のまま椅子に足を乗せてしまったりする。

その時の高揚した表情、特に大きく開かれた太ももはなんともいえない淫猥さを感じてしまうのだ。

「ミズキくん、靴のままはダメだよ」

「あ、いけねッ！」

俺は冷静たしなめながらも、ミズキくんのふとももを

瞳に焼き付けてしまう。まったく無駄毛がなく透き通った肌に、ぞくっとするほどの色気を感じていた。

『俺は・・・オトコノコが性癖だったのか・・・？  
そんなバカなわけがあるか！？ 俺は巨乳とデカ尻が  
大好きだったじゃないか！』

弟みたいな男子に興奮する、薄汚い肉欲・・・  
自分で自分を責めるも、その興奮が消えることはない。  
その夜、おれはとんでもない夢をみてしまった。









ショップの人気のないコーナーで、ミズキくんがズボンを脱ごうとしている。

「だめだよ、ぬいじゃダメ……」

俺が服を着せようとする、ミズキくんは体をクネらせ抵抗する。

「おにいちゃんッ やだッ ボクっ あっ！ あああ～」

「だ、だめだってば……こんなところで脱いだらおちんちんがみえちゃうって……」

しかし、いつの間にか脱いでいるのは俺で、ミズキくんのおちんちんを隠すために、彼の腰に興奮して反りかえったソレをこすり付けているのだ。

「おにいちゃんッ やだッ やだよッ ヘンタイ！」

ミズキくんは潤んだ表情で抵抗する、しかし、その可愛い小さな手は俺の勃起したちんぽを握ってしごいている。

「ああっ だ、だめだって、そんなことしちゃ……」

そう言いながらも、もっとしごいて欲しくてたまらない。



おにいちやあん…  
ボク、ぼくもう…  
やめてよお

ミズキくんっ  
だ、だめだよッ  
こんなところで…

やだよお  
おにいちやんッ  
おにいちやんッあぁッ  
ぼく、ボクもうッ

おつきいよお  
おちんちんぼつき  
してるう…

アッアッ  
あんっ  
おちんちんッ  
すごいっ

脱いじゃだめだって…  
みんなに見られちゃうよ  
はやくズボンをはいて…

なんで俺が脱いでるんだ？  
あああ…だめだよ、ミズキくんッ  
それは…俺のちんぽ…  
あああッミズキくんが  
俺のチンポ握ってるう…

くねくねッ

くねッ

くねくねッ

くねッ







あああゝだめだつ  
だめだよミズキくんッ  
あああゝで、でッでるッ...

おちんちんからでるッ  
きもちいいのくるッ!  
でちやうつでちやうッ!  
いっちやういっちやう!

ああっ! いくっ! いくっ! いくっ!  
でるう! だるう! だるう!  
あひっ! あひっ! あひっ!  
おちんぽいくう!

あああゝ  
あああゝ  
でるう...

おちんちんは汁がでるッ  
いっくういっくういっくう!









「おにいちゃん、聞ってる？」

「んっ ああ・・・なんだっけ？」

隣町でやっているマジグリ大会の日の朝、  
おれは最低の夢をみて夢精した。

そして、その感覚を反芻してしまっていた・・・。  
俺は最低のオトコだ、ミズキくんとの会話も上の空で  
彼の顔を直視できない代わりに、足や手をちらちら  
盗み見してしまっていた・・・。

もう一度言う、俺は最低のオトコだ・・・。

その日の大会でミズキくんは準優勝した。  
デッキがうまく回って大ダメージを出し、とんとん拍子  
にコマをすすめたのだ。

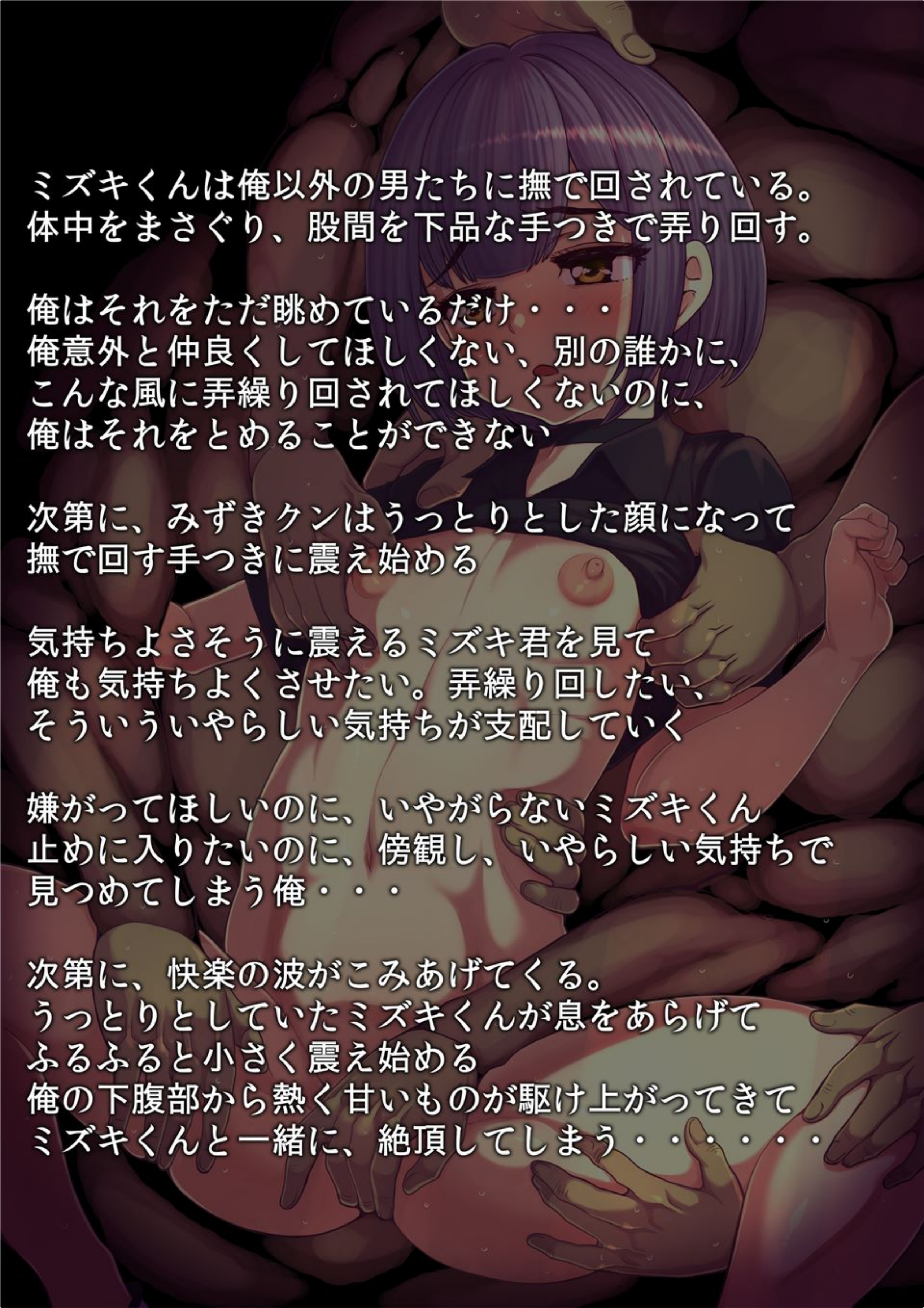
ミズキくんの周りには俺以外の男たちが群がり、  
デッキを見せ合いしたり、楽しそうに交流していた。

一度歪んだ情欲が頭を擡げると、それを拭うのは難しい  
らしい。その夜、またしても俺は最低の夢を見てしまう。









ミズキくんは俺以外の男たちに撫で回されている。  
体中をまさぐり、股間を下品な手つきで弄り回す。

俺はそれをただ眺めているだけ・・・  
俺意外と仲良くしてほしくない、別の誰かに、  
こんな風に弄繰り回されてほしくないのに、  
俺はそれをとめることができない

次第に、みずきクンはうっとりとした顔になって  
撫で回す手つきに震え始める

気持ちよさそうに震えるミズキ君を見て  
俺も気持ちよくさせたい。弄繰り回したい、  
そういういやらしい気持ちが支配していく

嫌がってほしいのに、いやがらないミズキくん  
止めに入りたいのに、傍観し、いやらしい気持ちで  
見つめてしまう俺・・・

次第に、快楽の波がこみあげてくる。  
うっとりとしていたミズキくんが息をあらげて  
ふるふると小さく震え始める  
俺の下腹部から熱く甘いものが駆け上がってきて  
ミズキくんと一緒に、絶頂してしまう・・・



ほら、こうすると  
気持ちいいだろ？

え、よくわかんない  
どうすればいいの？

なでまわされると  
シナジーやばない？

こみ上げてくる？  
出そうになってる？

あつ・・・  
なんか・・・

で、でちやう・・・？  
あつ・・・

このカードと  
このカードで  
すつごくきもち  
いいコンボきまるよ

ほらほら

ほら、もうすぐでるよ  
だしちやうていいよ

ボク、い、いっちやう  
でちやう・・・

気持ちよく  
なっちやうよ

いっちやうよ  
ミズキくん  
いっちやうッ

いくよ  
いくよ

ぐちゃ  
ぐちゃ







あつ!あつ!  
いっちやうッ!  
ボクいっちやうう!

ほらっほらっ  
きもちいいだろ?  
いけッいっちやえ!

いっちやえ  
いっちやえよ

でちやうッ!  
きもちいい  
お汁でちやうッ!

あひっ!  
あひっ!

きもちいいッ!  
いくっ!いくっ!  
いくッ!いくッ!  
でちやうッ!  
いっちやえ!

でるよ  
でるよ

だめだよ...  
ミズキくんイカないで...  
そんなやつらに  
イカされないで...

だしちやえッ  
ぜんぶぴゅっぴゅして  
きもちよくなる?

いくよ  
ほらいくよ

どくどく

どくどく





でるよ  
でるよ







ほらほら、ミズキくんも  
気持ちよくなってきたでしょ

や、やだっ・・・  
おにいちゃんっ  
たすけてッ

我慢しないで  
気持ちよく  
なっちゃえよ

ほおら  
ゾクゾクしてる  
じゃないか

あっ  
あっ

だめっ  
だめえ

腰がガクガク  
してるじゃん

気持ちいいんだろ？

もつと気持ちよく  
なろうぜ？  
ほれ、ほおれ









いけよッ  
我慢してんじゃねえ!  
とつとと出しちまえ!

あッ  
あッ!

もうッ  
もうだめだよお

いけッ  
ほらいケッ

でちやうッ  
ボクいつちやうッ

あへッ  
あへえ!

エツちなミズキの顔で  
みんなギンギンだぞ?

責任とって  
一緒にいけッ

だすぞッ!  
ミズキも  
だせッ!

いくッ  
おれもイケッ!

おおッ  
いくうう

ああ〜でるでるでる!

でちやうでちやう  
でちやうう!  
はううううう!

いくッ  
いくッ

せきん

せきん  
せきん

せきん  
せきん

せきん  
せきん

せきん









おはようございます

おはよう

おはようございます

おはようございます  
おはよう

おはようございます  
おはよう

おはよう

おはよう

おはようございます

おはようございます

おはようございます  
おはよう

おはよう

おはようございます

おはよう

おはよう

おはようございます

おはよう  
おはよう





オナネタに使われるミズキくんは俺に助けを求めながら男たちにもみくちゃにされている。

次第に快楽に落ちていき、その表情は抗いがたい肉欲の波に飲まれながら潤んでいった。

そして、俺の射精にあわせて絶頂する……。体をふるふるとふるわせて、ミズキくんの表情が、可愛くていやらしい。小さく荒い声を漏らしながら……

自分でミズキくんを犯す妄想ができないヘタレ……。信用してくれてる弟みたいな友達を、オナネタに使うような卑劣な男に成り下がってしまった嫌悪感。

さらに、オトコノコに欲情して性交しようとする事、それを認めてしまう恐怖心……

「ああっミズキくんッ……！！ うう……」

賢者タイムのむなしい気持ちは何時もよりいっそう強く、重く、俺を苦しめつづけた。







ゲーム会に行ってもミズキくんの顔がまともに見れない。  
とはいえ、幸いなことに前回の大会で準優勝だった彼の  
周りには新しいゲーム仲間が集まるようになっていた。

よそよそしくせざるを得ない俺は、そのおかげで適度な  
距離が取れていた。

しかし、一方で彼の周りにほかの男がまわりつくのは  
イライラした。ミズキくんは可愛いから人気なのは仕方  
ないのに。自分の身勝手な感情にもさらにイラついた。

「だからーミズキのデッキはさあ、カウンター仕込んだ  
ほうがいいんだって！」

「むしろドロー強化で即効性を高めては？」

「うーん、どっちも捨てがたいなあ～ねえ、お兄ちゃん  
はどっちがいいと思う？」

積極的に俺に話しかけてくるミズキくん。優越感を感じ  
ながらも、大人の態度で接しようと自分を落ち着かせる。

「どっちも一長一短あるなあ～  
実際動かしてじっくりくるほうにしたら？」



「そっかー・・・うーん、じゃあねえ・・・」

カードとにらめっこするミズキくん。  
俺が一番頼りにされてるという優越感と、彼をオナネタにして毎晩汚している罪悪感で、やはり目を合わせられない。

「カウンター系貸してやるよ、オレと対戦しようぜ！」

「え、いいの？ やった！オスオッス！」

ミズキくんは金髪のずんぐりとした男と対戦をはじめた。  
コイツはラブなプレイで口が悪く、あまり評判がよくない男だ。裏では金ブーと呼ばれている古参だった。

「ミズキのオスオッスってバンチョウジャーでしょ？」

「そう！ボクさあ、バンチョウジャー大好きなんだ～」

「首に巻いてるのバンチョーカーだよな？  
ガクラン戦隊だっけ？番長とか昭和かよお～  
あれ不人気だったよなあ～ギャハハハ！」

「う、うん・・・みんなダサいって言ってけどね～  
ボクは初めてハマった戦隊シリーズでさ～」









その日の夜、妄想でオナネタにされるミズキくんは金ブーに犯されていた。

俺の知らないネタで盛り上がるミズキくんを見て正直悔しくて、さびしくて、惨めな気持ちになった。

金ブーからバックで抱きつかれて、抵抗しながら俺に助けを求めるミズキくん。小さく開いた口からは「おにいちゃんっ おにいちゃんっ」と俺を呼ぶ声がずっと繰り返される。

金ブーは挑発的な目で俺を睨み、乱暴に腰を打ち付ける。次第にミズキくんの表情はトロけていき、快樂の吐息が支配する。

惨めな気持ちをごまかすように、射精する。気持ちいいのは一瞬で結局は惨めな気持ちしか残らない。

このままじゃダメだ。ミズキくんに、こんな穢れた気持ちをもたげたまま会い続けるのは、惨めだし…失礼だ。

自分の最低さをかみ締めながら、俺はミズキくんと決別することを心に誓った。



おにいちゃんッ！  
たすけてえ！  
やだよお！  
ボクッ！いやあ！

だめっ！  
やだあ！

おおう  
ミズキい  
きもちいかあ？

アッ  
アッ！

やっ！  
いやあ！

おにいちゃん！  
あっ！あっ！あひい！

あんなヤツほつとけよッ！  
おれがおにいちゃんになって  
やるからよッ！オラッ！オラッ！

あああ！すごえでそうッ  
ミズキッ！いくぞ！  
いっしょにいけっ！  
イケイケケケううう！

やだっ！やだっ！  
あああああでるう  
でちやううう！

ぐちゅ  
ぐちゅ

じゅ

じゅ













オ

ッ

ス

!!

押

忍



「え！ほんとにカード全部もらっていいの？」

「うん、新システムについていけないし、仕事が忙しくて頻繁に顔出せなくなりそうなんだ、引退しようかと」

「ええ～！そうなのー？ボクやだよお～  
おにいちゃんが一緒に遊んでくれるから楽しいのに！」

うれしくて涙が出そうになる・・・俺は無理に笑った。

「はははは！ほかの面子とも交流出来るようになってきたし、いろんな人と遊んだほうが強くなるって」

「そっかあ～じゃ、こんどさ、別のこととして遊ぼうよ！」

心が揺らぐ・・・いや、こんなに慕ってくれる友達に、汚い気持ちを隠して付き合い続けてちゃダメだ。

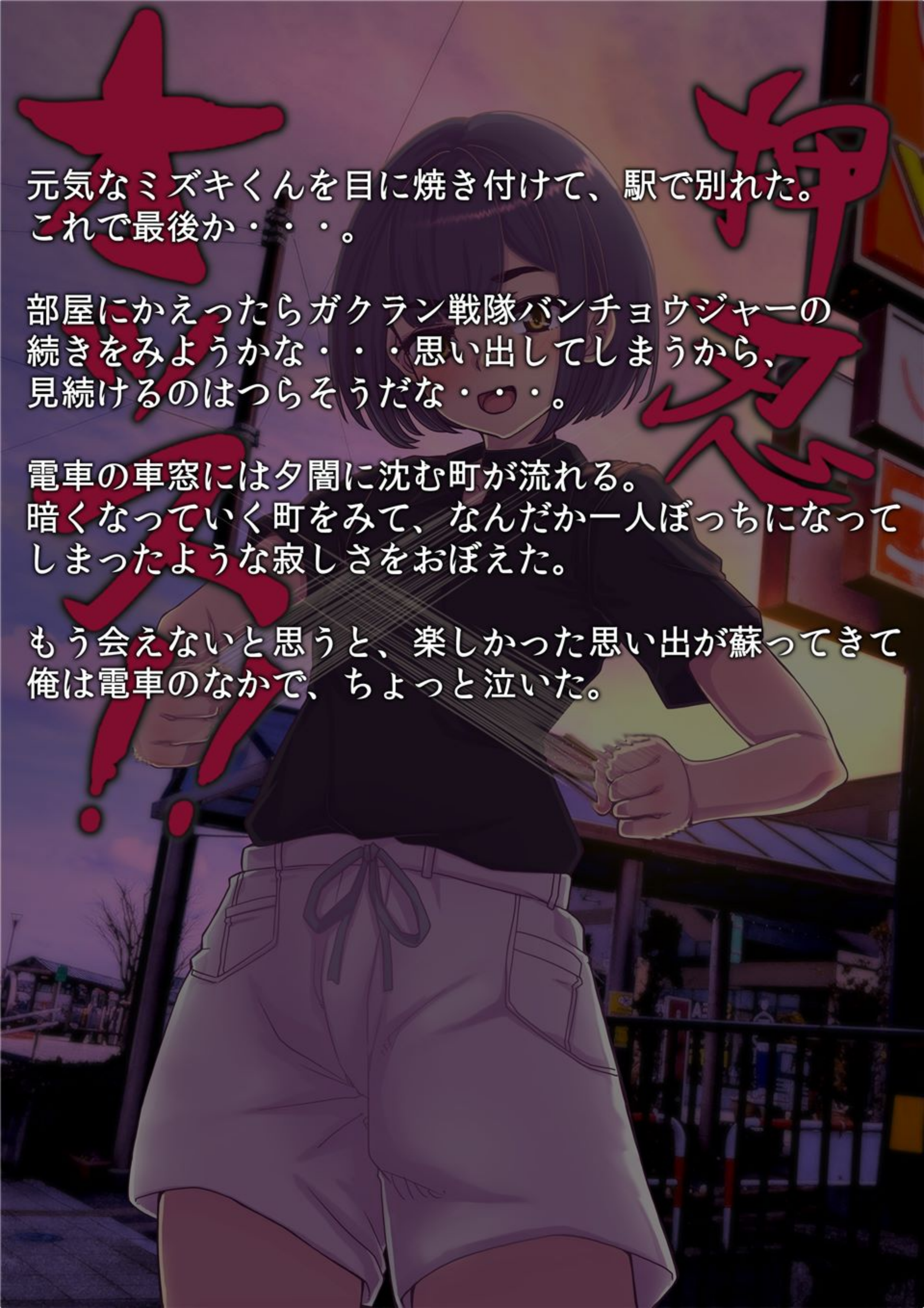
「バンカラきめて心は正義、ツッパリハッター日本晴れ」

「あ、バンチョージャーの歌！」

「今観てるんだ 歌覚えたらさ、カラオケいかない？」

「いく！オス！オスオッス！」





元気なミズキくんを目に焼き付けて、駅で別れた。  
これで最後か・・・。

部屋にかえったらガ克蘭戦隊バンチョウジャーの  
続きをみようかな・・・思い出してしまうから、  
見続けるのはつらそうだな・・・。

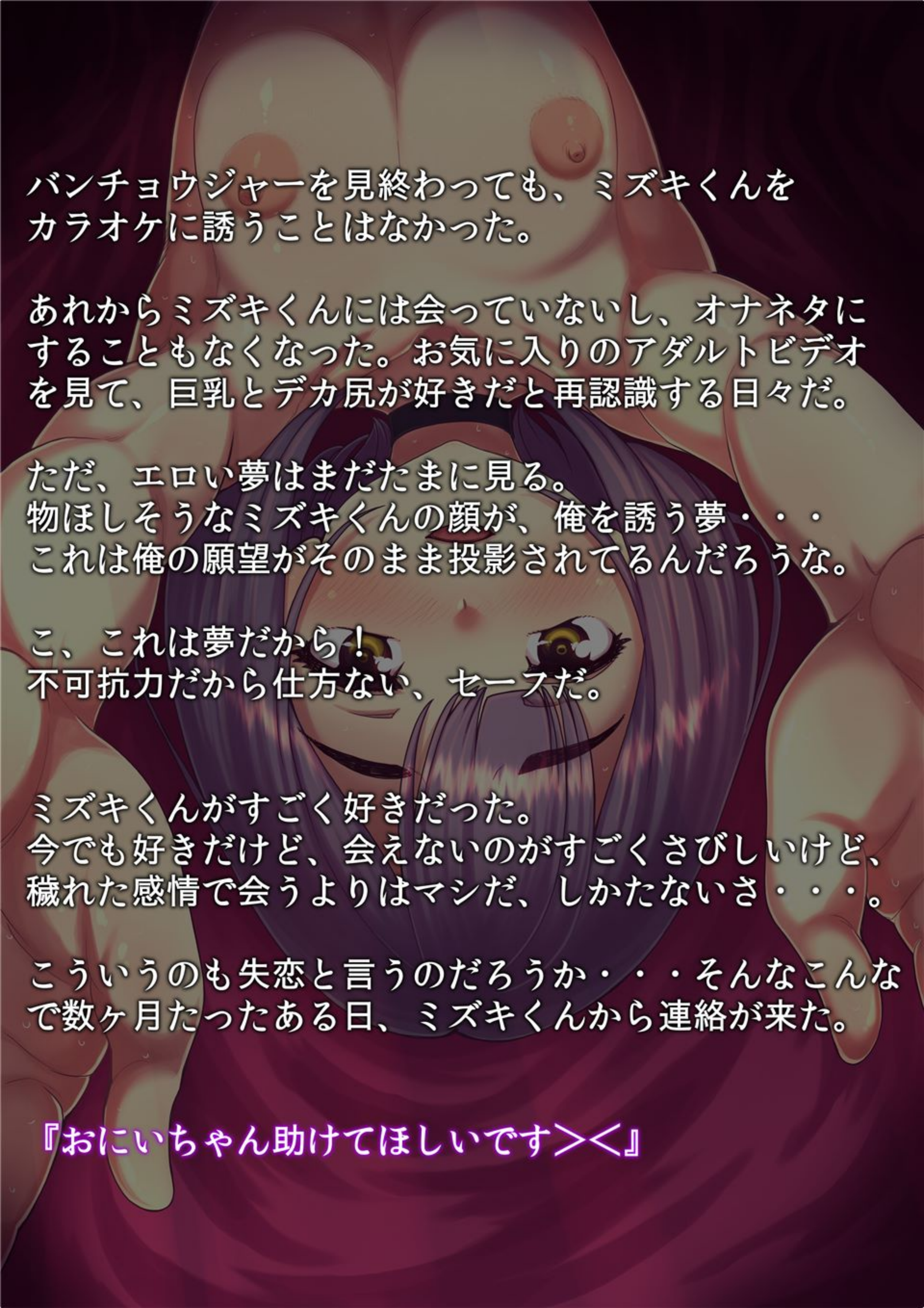
電車の車窓には夕闇に沈む町が流れる。  
暗くなっていく町をみて、なんだか一人ぼっちになって  
しまったような寂しさをおぼえた。

もう会えないと思うと、楽しかった思い出が蘇ってきて  
俺は電車のなかで、ちょっと泣いた。









バンチョウジャーを見終わっても、ミズキくんをカラオケに誘うことはなかった。

あれからミズキくんには会っていないし、オナネタにすることもなくなった。お気に入りのアダルトビデオを見て、巨乳とデカ尻が好きだと再認識する日々だ。

ただ、エロい夢はまだたまに見る。  
物ほしそうなミズキくんの顔が、俺を誘う夢・・・  
これは俺の願望がそのまま投影されてるんだろうな。

こ、これは夢だから！  
不可抗力だから仕方ない、セーフだ。

ミズキくんがすごく好きだった。  
今でも好きだけど、会えないのがすごくさびしいけど、  
穢れた感情で会うよりはマシだ、しかたないさ・・・。

こういうのも失恋と言うのだろうか・・・そんなこんなで数ヶ月たったある日、ミズキくんから連絡が来た。

『おにいちちゃん助けてほしいです＞＜』





< ミズキ

21:25

10:09

2/18(日)

電話くれた？  
仕事長引いて連絡できなかった  
ごめんね〜  
10時過ぎなら電話できるので、  
しばらく待ってもらっていい？

既読  
21:15

いそがしいのにごめん  
たすけてほしいです>><  
金辺さんのカード折っちゃった

21:18

まじで？

既読  
21:22

初期金マギ、カットの時に  
一回しかカットしなかったから  
そんなはずないって思ったんだ  
けど、僕ガサツだし興奮すると  
よく怒られてたし

21:23

なるほど

既読  
21:23

どうしたらいいかな

21:24

Aa



久しぶりに会うミズキくんはすっかり落ち込んでいた。

俺と会えなくてさびしかった・・・だったら良かったの  
だが、問題はかなりめんどくさそうなものだった。

「つまり、金ブー...あいや、金辺(かなべ)のレアカード  
を折っちゃったてこと？」

「ボク・・・そんなわけないと思ったんだけど・・・  
一回しかカットしないのにさあ・・・」

でも、ボクがさっだし、20万なんて払えない・・・」

ミズキくんはあれから金ブーとよく対戦やトレードを  
していたそうだ。

対戦中には互いのカードをカットするのだが、その時に  
カードが折れたから弁償しろという事だった。

「金の魔人マギガルは初版だと20万くらいするけど  
普通デッキにいれないよなあ・・・」

とりあえず金ブーと話すよ、俺に任せてくれる？」



